

伊東四朗さん

喜劇役者



ITOH
SHIROU

【いとう・しろう】1937年、東京都出身。高校卒業後、大学生協でアルバイトをしていたところ、58年、軽演劇の座長・石井均に誘われ劇団「笑う仲間」の一員になり、21歳の時、浅草の松竹演芸場でデビュー。62年三波伸介、戸塚睦夫と共に「てんぶくトリオ」を結成、65年日本テレビ「九ちゃん!」のレギュラーに抜擢。その後、単独で映画やドラマへの出演依頼がかり、「ムー一族」「天と地と」「おしん」など数多くの作品に出演。82年「てんぶくトリオ」はメンバーの逝去に伴い自然消滅。喜劇役者、役者に加え、バラエティ番組の司会者、ラジオのパーソナリティなど多方面で活躍し続けている。



途轍もなく遠かった世界で、
出会いが紡いだ60余年

INTRODUCTION

その名前を聞いて頭に浮かぶ役柄は、人によってさまざまではないだろうか。
「電線音頭」のベンジャミン伊東、『笑ウせえるすまん』の喪黒福造^{もくろくふくぞう}、『伊東家の食卓』のお父さん……。お茶の間を笑いの渦に巻き込んだ番組、多くの涙を誘った名ドラマなど出演した作品はあまりに多すぎて、とても書ききれない。
83歳となった現在も八面六臂^{はちめんろくつひ}で活躍し続けている伊東四朗さんに、デビュー当時のことから喜劇役者としての思い、健康法まで話をうかがった。

Comedy Actor
ITOH SHIROU

——60年以上にもわたり芸能界で活躍されている伊東さんですが、自ら志して入られた世界じゃなかったそうですね。

芝居が大好きでいろんな舞台を観に行っていましたけれど、自分なんかができるはずないという思いが先にありましたし、芸能界は今よりも途轍もなく遠いところになりましたのでね。役者をやろうなんていう気は全くありませんでしたよ。会社に入って、定年まで勤めるのが親孝行だろうと思っていました。

——それが、大学生協でアルバイトをしていた時、足繁く通っていた舞台の座長から声を掛けられたことがきっかけとなり役者の道を歩まれるようになったんですね。そこで出会った三波伸介さんや戸塚睦夫さんと「てんぷくトリオ」を結成し、テレビに出演されるようになって、お茶の間の人気者になられていったと。

売れるなんて思ってもいませんでしたけどね。最初はグループ名も無く「三波戸塚伊東トリオ」なんて言っていたくらいです。

林家三平さんのはからいで憧れの日劇の舞台に出たりしていたのですが、ある時、一人のテレビプロデューサーの目に留まったんです。その方は（坂本）九ちゃんの新番組制作のため、お笑いパートの人材を探していたらしいんですね。とは言っても、アメリカの『エド・サリヴァンショー』みたいなシャレた感じの番組を目指していたので、泥臭いコントをやっていた僕らが出演させてもらえるわけがないとあきらめていました。ところが、あにはからんや、僕らが選ばれた。これは僕らにとつて転機になりましたね。もう一つ大きかったのは、井上ひさしさんにてんぷくトリオの座付き作家（専属作家）になってもらったことです。

——あの直木賞作家の井上ひさしさんが、コントの台本を書かれていたのですか！

そうなんですよ。もうネタが無くなっていって詰っていた時、井上さんにコントを書いてもらえたことは、僕らが生き残ることができた大きなポイントだったと思います。

井上さんは自ら「遅筆堂^{ちひつどう}」と名乗るほど筆が遅い方でした。当時のテレビ番組は生放送なのに、テレビ局に入ってもまだ台本が届いていない。放送直前によくお弟子さんが生台本を抱えて走ってきて、それを2回読めたかどうかという状態でカメラの前に飛び出していく。毎回綱渡りで、いやでも真剣にならざるを得ない。もう覚えるしかないんですから。ただ、覚えると言っても、井上さんのコントは登場人物の人格が瞬時にコロコロ変わって難しかった。それを懸命になってやったのが、結果的には良かったんじゃないかと思えますね。

会社に入って、定年まで勤めるのが親孝行だろうと思っていました。



「どんな時でも、
手を抜いてはいけない」と
気が引き締まりました。
「どこで、誰が見ているか
わからない」ということです。

「ギャラを頂くからにはそれに値するだけの人にならなければならない」ということを、徹底的に教えてもらいました。

——コメディアンであっても、役者以上の演技を意識されていたのですね。

ある年の元旦の新聞コラムで、映画監督の市川崑さんが、今年期待されるホープの一人として私の名前を挙げてくれました。「名前は知らないが、てんぶくトリオの中の一番若い男で、とにかく台詞と動きのタイミングがとても良い」と言ってくれたんです。有名な映画監督が僕らのコントを見てくれていたことに驚きましたし、演技を褒めてもらえたことは、私にとって大きな励みになりましたね。それ以来「どんな時でも、手を抜いてはいけない」と気が引き締まりました。「どこで、誰が見ているかわからない」ということです。

——その後、役者としても活躍の場を広げられ、NHK大河ドラマ『天と地と』や朝ドラ『おしん』など数々の作品に抜擢されたわけですね。「喜劇役者」と「役者」では、仕事に向き合う姿勢が違うのですか。

結果として違うものになっているだけであって、向き合い方は全く同じです。

喜劇だって笑わせようと思ってやっていないですよ。結果的に笑ってもらえるのであって、こちらから笑わせようとすると失敗しますね。喜劇にとって、お客さんが笑ってくれないことほど怖いことはありません。笑ってくれなければ「詐欺」になりますから。

——極限まで追い詰められたことで底力を発揮し鍛えられていったのですね。坂本九さんの番組でも同じ状況だったのですか。

九ちゃんの番組ではたっぷり稽古しましたよ。そこで初めてジャズを歌ったりタップダンスを踊ることになったのですが、なんとかなるまで帰してもらえなかった。音程が4分の1音違っただけでも、音符通りになるまでしごかれましたね。

——歌手でもないのに？



藤子不二雄®氏の漫画『笑ゥせえるすまん』
がテレビドラマ化された際には、主役の喪黒
福造を演じた（1999年）

私は「喜劇はどんな芝居よりも真面目にやらなきゃいけないものだ」と思っています。一時でも目を離してはいけないのが喜劇です。観るほうも台詞をちゃんと聞いていますからね。だから、喜劇は劇場でないと難しいんですね。テレビだと電話が鳴ったりして大事な場面を見逃がしたりしますが、劇場なら途中で席を立つことはほとんどありませんから。

——役者は台詞を覚えるのが大変だという話をよく聞きますが、伊東さんは台詞覚えはいいほうなのですか。

いいほうだったんですけど、だんだん悪くなってきましたね。年齢的に、ある程度仕方がないことだとは思いますが。

——伊東さんが70歳の時に出了された『ボケてたまるか！』を読ませていただきましたが、円周率を千桁まで暗記していたり、百人一首を暗唱できたり、脳のトレーニングになるようなことをされているのですね。

仕事で外国へ行くことが多かったんですけど、飛行機に乗っていると眠れないたち

なんです。例えばモスクワ経由でローマへ行くとなると相当時間がかかる。その間、何をしたらいいかと考えて、百人一首の本でも持つていこうかと始めたのがきっかけでした。上の句、下の句に加えて作者名も覚えたらかなりの量なんです。帰国後まで時間はかかりましたが、全部覚えしましたね。

ドラマや映画の撮影では結構待ち時間があるんで、その時間もよく利用しました。千桁の円周率は待ち時間に覚えましたが、アメリカ合衆国の50州や世界の国名、日本の昔の国名68州なんかも覚えしました。

覚えることで台詞覚えの一助になればという思いもあったんですね。暗記することで頭の中のベルトコンベヤーを絶えず回転させていると、その上に台詞を載せてやれば覚えやすくなるんじゃないかという自分の考えがあつたんです。それでいろんなことを覚えましたが、そこから知識や興味の幅も広がりました。

——頭の中のベルトコンベヤーは、今でも動かされているのですか。

頭の中のベルトコンベヤーを
絶えず回転させていると、
その上に台詞を載せてやれば
覚えやすくなるんじゃないか。

覚えたものは今でも復唱していますよ。じゃないとやっぱり忘れていきます。電車の中でもブツブツ言っていますから「ヘンなおじさんだな」と不審がられて周囲の人が離れていくようなこともありますよ。ベルトに出していないとダメなんです。ベルトコンベヤーは動力を与えてやらないと。

——声を出すことが動力になるのですか。

伊東さんは新聞も毎朝2紙、読まれているそうですね。

毎日楽しみにしています。一番左とかわれる新聞と右とかわれるのを読んでいますが、面白いですよ。同じ事象でも「それぞれこんな捉え方をするんだ。なるほどな」と唸りますね。

——煙草やお酒はたしなまれるのですか。

煙草は29歳できっぱり止めました。お酒は飲みますが、体質的に強くないから深酒することはありません。

健康のためにやっているのは、毎日1万歩を目指して歩くことです。「老いは脚からくる」と聞きますのでね、朝早い仕事や大雨で

もない限り毎朝歩いています。早朝からわりと遠くまで行っていますよ、女房と一緒に。

——奥様とご一緒とは、素敵ですね。

はい。若くないから、楽しい会話もありますね。

——『ボケてたまるか!』を読んで、奥様の料理も健康に良さそうな気がしました。

女房はいろんなものを手作りしてくれて、最近では米麴まで作ってくれますが、納豆も米麴で食べるとうまさが増しますよ。

——それらが奏功しているのでしょうか、83歳とは思えないほどお元気な伊東さんですが、浮き沈みの激しい芸能界の第一線で長年、活躍し続けられている要因は何だとお考えですか。

私自身、第一線でやっている感覚はなかったですね。というのも、訓練もなくこの世界に入れてもらったことが、未だにコンプレックスになっているんですよ。演劇学校では必修といわれるスタニスラフスキー演技法なんて1行も知らないですから。

その代わり、劇場のお客さんに教えてもらったことは随分あります。お客さんの笑い声の中にも「言葉」があるんですよ。「ワッ」と笑ってくれていても、「違うぞ」という声がどこかで聞こえるんです。「もつと面白くなるよ」という声が。だったら、どうすれば面白くなるかいろいろ考えて、翌日の舞台でやってみる。そうやって皆と一緒になって舞台を作り上げてきましたね。

——笑い声の中の言葉を感じ取るんですね。

舞台で演じていても、客席のどこかに自分の席を作っておかないと、お客さんに置いていかれるぞ。

私は「舞台で演じていても、客席のどこかに自分の席を作っておかないと、お客さんに置いていかれるぞ」と思いながらやってきました。

——客席の中に自分の席、ですか。

「演じながらも、お客さんの目線に立っているか」ということです。例えば、お客さんがまだ理解していないうちに次の台詞を言ってしまうと、喜劇ではとくに不親切なんです。お客さんの頭の中では、役者の台詞を一度反芻して、話に納得する時間が必要なんです。時間にしたら、わずか0コマ何秒のことですが、そのコマ何秒を逃しただけで、昨日までウケていた場面もウケなくなる。そういう意味で喜劇は怖いんですよ。

——同じ脚本を、同じ役者が演じていても、ですか？

そうです。ウケなくなる原因は演じる側の「慣れ」です。舞台の初日は自分もお客さんと同じ目線で相手の台詞を真剣に聞いているけれど、舞台を10日も続けていると相手の台詞を覚えてしまつて、慣れが出てきてしまう。それでお客さんが理解する前に次の台詞をかぶせたりすると、少しずつ

ズレが生じて、笑いが起きなくなるんです。——なるほど。だから、お客さんの目線であることが大事なのですね。とは言っても、演じる側がお客さんの目線を保持することは難しいような気がします。

楽屋で準備していると、お客さんが客席に入ってくる時の音がザワザワと聞こえてくるんですね。その声で、お年寄りが多いのか、若い人が多いのか、その日の客層がわかります。そこでお年寄りが多いのであれば、ちよつと親切なしゃべり方をしよう意識します。

例えば、「この前、運転してさー」という台詞があつたら、車のハンドルを握っているジェスチャーをしながらしゃべると伝わりやすくなります。このジェスチャーも、若い人にとっては、逆に邪魔なんですよ。長くやっている、そういうことを考えるようになりましたね。

——どれほど舞台に立とうとお客さんの目線を持ち続けているからこそ、長く活躍し続けられているのかもしれないね。

そうかもしれません。振り返ってみれば、「もう終わりかな」と思った時、いつも良い



タイミングで声を掛けてもらいました。
三宅裕司氏から「一座を持ちませんか」と声を掛けられた時も、最初は「俺は一座の頭に立つような役者じゃないから」と断ったけれど、しばらくして「だったら、『伊東四朗一座』旗揚げ解散公演」って、どうですか」って。「1回きりで解散していいってこと？ いいね。だったら、やろう」と言って、その後5回もやりました。彼のおかげで初めて一座の頭に立つ経験もでき

いろんな人たちとの出会いが、私にとって一番得をしたことだったですね。

ましたし、三谷幸喜氏や佐藤B作氏のおかげで良い作品と巡り合うこともできました。彼らをはじめ、いろんな人たちとの出会いが、私にとって一番得をしたことだったですね。

——伊東さんが喜劇役者としてやりがいを感じられるのは、どんな時ですか。
舞台が終わった後、劇場のスタッフから「お客さんが面白かったと言っていました」と聞くのが一番うれしいです。

——仕事で、ストレスを感じられることはありませんか。

舞台初日の幕開けのベルが鳴った時、頭の中から台詞が全部無くなってしまうような錯覚に陥る時があるんですね。それが一番怖いんです。だから、初日の舞台は楽屋で青くなっていますよ。

——長く活躍されている中で、辞めたいと思われたことはないのでしょうか。

ちよつと睡眠をとりたいなと思ったことはありませんけど、辞めたいと思ったことは一度もないです。こんな素人を受け入れてくれた世の中に対して、自分から辞めたいなんて言ったら「違反」でしょ。今は、いつ辞めても誰からも文句を言われない年齢になりましたけどね。その点では気が楽です。

——今後も仕事は続けられるんですね。

求められる以上はずっとやりたいと思っていますが、年のせいで相手に迷惑をかけることが増えてくると思いますので、そうなった時には考えようと思っています。

文化放送のラジオ番組『伊東四朗 吉田照美 親父・熱愛』は24年目になりますが、生放送で常に頭を回転させています。時には放送中にリスナーから耳の痛いような声が届くこともあります。それもありがたいと思っています。批判的な視点も必要なものですから。

——今後のご活躍も楽しみにしています。お話しいただき、ありがとうございました。

(インタビュー／ライター 更田沙良)